

講義「女性と日本文化」の効果測定する項目の検討

牛ノ濱幸代¹⁾, 大園 孝子¹⁾, 山下 美穂¹⁾, 平田 直美²⁾

要 旨

初年次教育の一つである当講義の授業効果の客観的な把握に繋げるため、試みに測定可能な評価項目を検討した。

対象は、A 私立女子大学看護学科、選択科目として受講した平成 20 年度 1 年生 30 名、及び 21 年度から必修科目として受講する前の 1 年生 50 名、計 80 名、有効回答 80 名 (100%)。

まず過年度の学生のレポートより①「一般的なマナーを身につける大切さ」、②「礼儀を心がける必要性」、③「美しさに気づくことによる感性の刺激」、④「日本文化の楽しさ、美しさを次世代に伝える希望」、⑤「視野が広がり人間としての成長」、⑥「生活を豊かにすることに有効」、⑦「文化継承の大事さ」、⑧「実習時の話題や言葉遣いに有効」、⑨「看護に必要な相手を尊重する心の学び」、⑩「日本文化への無知さの実感」の 10 項目を抽出した。

学生が学習した内容は、目指した教育内容と学生の学びの内容は一致しており、10 項目が、授業が学生に影響を及ぼした結果として表面妥当性があるとみなせる。かつ、大学生に求められているキー・コンピテンシーの自己形成力の展望力、自己形成力の対話力、道具的活用力の読解力に一致していると解釈できた。10 項目の信頼係数は $\alpha = .830$ と高い信頼性を示した。

この 10 項目『講義「女性と日本文化」の効果測定項目』を尺度として測定を試みた。そして、各項目についてマン・ホイットニーの U 検定を実施したところ、8 項目で有意差を示した。

方法に関し、標本の偏り、両端の度数が小さくなる点数化の工夫、5 件法以上の点数化、等尺度作成上の検討、安定性等に関し、再テスト法等により検討が必要である。さらに、妥当性に関する検討は表面妥当性のみであり、専門講師を交えて内的整合性から検討を始める必要がある。

キーワード：初年次教育、看護系大学生、効果測定

I. はじめに

初年次教育とは、「高校から大学への移行という青年期にとっての重要な転換期を支援する教育」として定義され、「中等教育から高等教育への転換教育」、「専門教育の導入教育」、「教養教育」等を目的としている。2008 年の中教審大学分科会制度・教育部会による審議や答申のまとめから、初年次教育は高等教育では不可欠な教育プログラムと認識されている¹⁾。

さらに、第一回初年次教育学会総会が平成 20 年 11 月に開催され、その報告が始まっている。日本での初年次教育のプログラム構築は増加しているが、実践や研究実績の蓄積や共有はまだ十分とはいえないとされる。初年次教育に関する今後の課題として、実践的な教育内容や効果的な教育方法の開発・改善、教育効果の測定や理論的説明、重要性の高等教育に定着化があげられている。

さて、看護教育においてその専門性が高く、初年次教育の内容が専門への導入教育に傾く傾向はある意味やむを得ないともいえる。大学の大衆化に伴って、大学の一般教育で社会人として必要となる人間関係における礼儀作法、感情の自己統制等の人間の資質育成も求められて

いる²⁾。看護を提供するにあたり、看護の対象である人間を専門的知識に基づく狭い視野からの理解と実践にとどまらない、看護の対象の人権を護る以上の実践のできる資質の育成も要請されている。看護系大学は、限られた時間の中で一般教育の充実かつ専門教育の充実、と一見矛盾した課題を抱えつつ、各看護系大学は独自性を持ち時代の要請にこたえるカリキュラム編成に取り組んできている。

さて、A 大学は、教養豊かな学生の育成を目指した初年次教育に早期より取り組み、創意工夫を図っている。看護学科は、大学の独自性を発揮した看護教育のカリキュラム編成の中で、初年次教育での工夫として、正課内の教養教育の科目として平成 17 年度より「女性と日本文化」の講義を開講している。この授業は日本の伝統文化である茶道・装道・華道をその道の師範から指導を受け直接体験する。日本文化と「道」について理解することが目的である。「ここでの体験は一人の人間として生きていく過程において社会文化的な要素を身につける動機付けとなり生活をより豊かにするばかりでなく、次世代を育み、伝統文化を継承する担い手となることをねらいとしている。」

第 18 回日本看護学教育学会において、専門職業人の能力育成として新たなコンピテンシーモデルの議論がさ

1) 鹿児島純心女子大学看護栄養学部看護学科

2) 鹿児島大学大学院保健学研究科博士後期課程

れている。立田はその学会でキー・コンピテンシーの概念の解説、背景、意義について教育講演した。キー・コンピテンシーとは「特定の問題状況に対応するため、知識や技能、態度を含め多様な資源を活用し、動員して、複雑な需要やニーズに応える力」である。構成するカテゴリーとして1 自己形成力、2 人間関係力、3 道具活用力をあげている³⁾。

学生は、講義「女性と日本文化」に対し「お嬢様の学習内容で自分には縁がない」と抵抗を示した状態から、講義後は多くを学び態度を変えており、中には課外で学習を継続する学生が主出現すると、好評を得ている。同様に、華道・茶道・書道を取り入れた教養演習を導入した薬学部薬学科による学生自身の教養・マナーの養成に有用との示唆を得た報告⁴⁾はあるが、医中誌やCiNiiにて文献検索したところそれ以外の正課内で本講義と同様の講義に関する報告は、看護系大学を含め大学における報告を認めなかった。

さらに、初年度教育はその普及は行われたが、講義効果に関する標準化された尺度での数量化されたデータを伴う評価は見当たらない⁵⁾。

そこで、初年次教育の一つである当講義の授業効果の客観的な把握に繋げるため、試みに測定可能な評価項目を検討することにした。

以上より、講義「女性と日本文化」が初年次の学生に与える影響について測定を試み、測定に使用した項目の有用性を検討する、これを研究の目的とする。

II. 方 法

1. 対象

A 私立女子大学看護学科、選択科目として受講した平成 20 年度 1 年生 30 名、及び 21 年度から必修科目として受講する前の 1 年生 50 名、計 80 名、有効回答 80 名 (100%)。

2. 研究期間

平成 20 年 12 月～平成 21 年 9 月

3. 調査項目

1) 講義「女性と日本文化」の効果内容の抽出

まず、平成 19 年度の授業効果の内容を探索するため、授業を修了した学生のレポートから学んだ部分を教員 4 名が KJ 法により帰納的に分析し、学生が記述した表現を可能な限り忠実に使用し、学んだ要素を抽出した。

2) 『講義「女性と日本文化」の効果測定項目』

平成 20 年度講義後と平成 21 年度講義前に、平成 19 年度のレポートから抽出した 10 項目の学んだ要素について、1. 「思わない」 2. 「あまり思わない」 3. 「やや思う」 4. 「思う」の 4 件法による 10 横目のリッカート尺度を作成し授業効果の測定を試みた。

4. 倫理的配慮

- 1) 研究者が講義を運営する学科長及び、講義担当の各講師に研究の説明を行い、同意を得た。
- 2) 研究者が対象者に自由意志による研究参加、プライバシーの保護、研究参加が成績には関連しないこと等について、文書と口頭で説明し、参加について十分に検討できる時間を設けた。
- 3) 参加者に、いついかなる状況でも参加を中止できる自由を保障した。
- 4) 参加同意が得られた場合、対象者から同意書に署名をいただいた。
- 5) データは匿名にて収集し、個人が特定されないように、取り扱った。

5. 統計学的な解析方法

統計パッケージ SPSSver.14.0 を使用した。『講義「女性と日本文化」の効果測定項目』の 10 項目について、測定した。

次に、講義の体験の有無に差異がある「平成 20 年度の元 1 年生講義後の学生」と「平成 21 年度現 1 年生講義前の学生」の 2 群間に差異がないか対応のない t 検定で確認し、有意差を認めたため、2 群毎に分析していった。

そして、10 項目を尺度とみなしたときの α 係数を求めた。さらに、2 群間で、『講義「女性と日本文化」の効果測定項目』の各項目の 4 件法の点に差があるか、マン・ホイットニーの U 検定を実施した。

III. 結 果

1. 『講義「女性と日本文化」の効果測定項目』の内容と記述統計

平成 19 年度の「女性と日本文化」を受講した学生のレポートより KJ 法にて抽出した、受講により学んだ 10 項目 (10 番目項目は逆転項目) の要素を表 1 に示した。

この 10 項目を一つの測定道具とみなし『講義「女性と日本文化」の効果測定項目』を平成 21 年 1 月と平成 21 年 9 月の 2 時点で、その年度の受講生に対し測定し信頼係数は $\alpha = .855$ の高い信頼性を示した。平成 20 年度受講後は $\alpha = .665$ と並程度、平成 21 年度の受講前の学生は $\alpha = .846$ と高い信頼性係数であった。

10 項目の総合点に関するデータを異なる対象で、2 群を一緒に分析が可能であるか検討するため、学年別の 2 群で 10 項目の計の差を確認した。最初、2 群の等分散性のための Levene の検定にて等分散を確認した ($F = 18.942$, $p < .001$)。次に、対応のない t 検定を実施したところ、 $t = -4.932$ で $p < .001$ で、差異を確認した。

以上より、今後は 2 群の結果を別々に記述していった。

2 群別の『講義「女性と日本文化」の効果測定項目』各項目の度数分布をヒストグラムにて図 1～10 に示し

表 1. 「女性と日本文化」から学んだ 10 項目の要素

項目	要素
①	「一般的なマナーを身につける大切さ」
②	「礼儀を心がける必要性」
③	「美しさに気づくことによる感性の刺激」
④	「日本文化の楽しさ、美しさを次世代に伝える希望」
⑤	「視野が広がり人間としての成長」
⑥	「生活を豊かにすることに有効」
⑦	「文化継承の大事さ」
⑧	「実習時の話題や言葉遣いに有効」
⑨	「看護に必要な相手を尊重する心の学び」
⑩	「日本文化への無知さの実感」

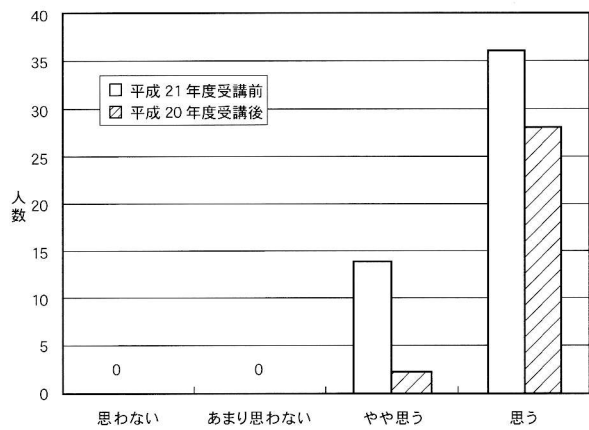


図 1. 項目①「一般的なマナーを身につけることが大切だと思う」に関する受講前後の推移

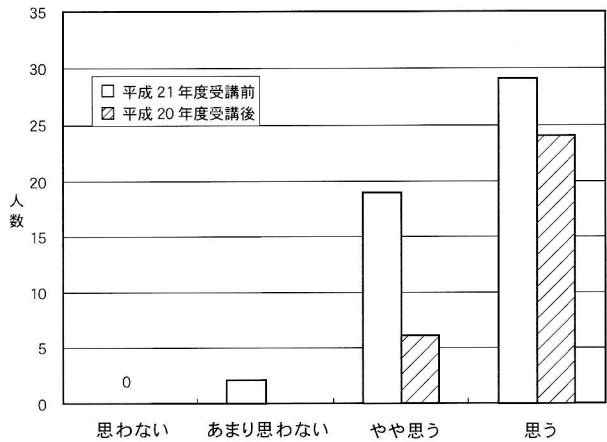


図 2. 項目②「普段の生活の中から礼儀を心がける必要がある」に関する受講前後の推移

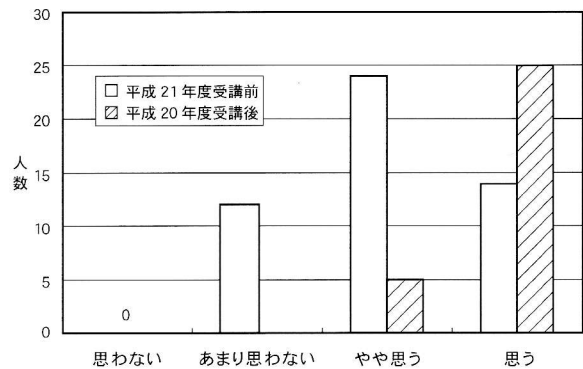


図 3. 項目③「花の美しさや立ち居振る舞いの美しさに気づき、感性が刺激されそう」に関する受講前後の推移

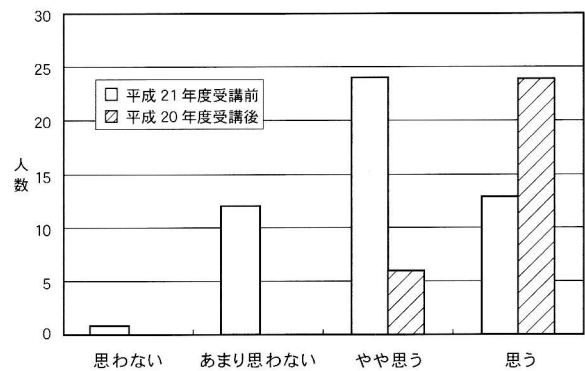


図 4. 項目④「日本の伝統文化に触れて、楽しさ・素晴らしさを次世代の人に伝えていきたい」に関する受講前後の推移

た。(項目⑩は逆転項目のまま表示)

平成 20 年度受講後は、いずれも分布は正規分布を示さなかった。項目①～⑨で左肩上がり、その他の項目は全て右肩上りを示した。つまり、講義の学生は全ての項目に肯定的評価ほど多くなる傾向にあった。項目⑩「日本文化への無知さの実感」に関しては否定を示した。

平成 20 年度の受講後の学生で賛成意見の多かったのは、項目①「一般的なマナーを身につける大切さ」項目③「美しさに気づくことによる感性の刺激」などであった。反対意見の多かったのは、項目④「日本文化の楽し

さ、美しさを次世代に伝える希望」、賛成意見の少なかったのは、項目⑨「看護に必要な相手を尊重する心の学び」、⑩「日本文化への無知さの実感」であった。

平成 21 年度の必修科目になった講義前の学生で点の高い、つまり賛成意見の多かった項目は、項目①「一般的なマナーを身につける大切さ」、項目②「礼儀を心がける必要性」であった。質問の内容によって多様な分布を示した。項目①「一般的なマナーを身につける大切さ」、項目②「礼儀を心がける必要」、項目⑧「実習時の話題や言葉遣いに有効」に関する項目で肯定的な評価ほど多

表 2. 2 群間の『講義「女性と日本文化」の効果測定項目』の各項目の差の検定

項目	群名	n数	平均ランク	順位和	U値	Z値	p
①	平成21年度受講前	50	37.30	1865	590	-2.295	*
	平成20年度受講後	30	45.83	1375			
②	平成21年度受講前	50	37.08	1854	579	-2.063	*
	平成20年度受講後	30	46.20	1386			
③	平成21年度受講前	50	31.60	1580	305	-4.845	**
	平成20年度受講後	30	55.33	1660			
④	平成21年度受講前	50	31.62	1581	306	-4.800	**
	平成20年度受講後	30	55.30	1659			
⑤	平成21年度受講前	50	34.74	1737	462	13.199	**
	平成20年度受講後	30	50.10	1503			
⑥	平成21年度受講前	50	33.98	1699	424	-3.505	**
	平成20年度受講後	30	51.37	1541			
⑦	平成21年度受講前	50	34.74	1737	462	-3.315	**
	平成20年度受講後	30	50.10	1503			
⑧	平成21年度受講前	50	37.65	1883	607	-0.002	
	平成20年度受講後	30	45.25	1358			
⑨	平成21年度受講前	50	36.26	1813	538	-2.321	*
	平成20年度受講後	30	47.57	1427			
⑩	平成21年度受講前	50	41.06	2053	722	-0.311	
	平成20年度受講後	30	39.57	1187			

*p<.05

**p<.01

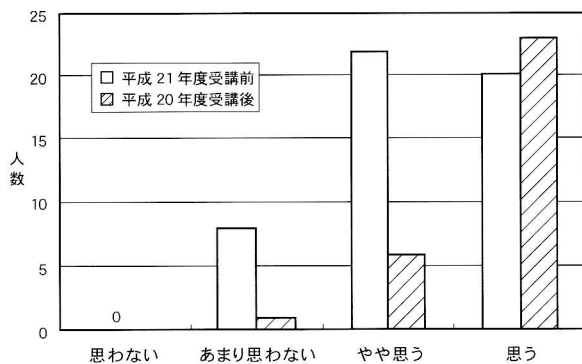


図 5. 項目⑤「人間として視野が広がり成長できる機会となる」に関する受講前後の推移

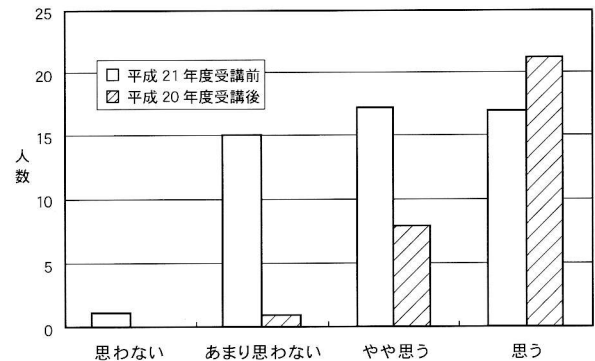


図 6. 項目⑥「この授業は生活を豊かにすることに役立つと思う」に関する受講前後の推移

くなった。項目⑩「日本文化への無知さの実感」という知識不足を問う項目は不足を認知する傾向が多かった。

2. 『講義「女性と日本文化」の効果測定項目』各項目の2群間の測定値の差の検定

各項目を度数分布でみると正規分布を示していなかったため、異なる対象の2群間の点数の比較に、対応のないt検定が使用できないと判断した。そこで、ノンパラメトリック検定であるマン・ホイットニーのU検定を実施した。

結果を表2に示した。①「一般的なマナーを身につける大切さ」、②「礼儀を心がける必要性」、③「美しさに気づくことができ感性の刺激」、④「日本文化の楽しさ、美しさを次世代に伝える希望」、⑤「視野が広がり人間としての成長」、⑥「生活を豊かにすることに有効」、⑦「文化継承の大事さ」、⑨「看護に必要な相手を尊重する心の学び」の8項目で有意差を示した。

いずれも、受講後の学生が受講前の学生より、肯定的意見が多い傾向であった。

IV. 考 察

講義「女性と日本文化」が初学年次の学生に与える影響について測定を試み、講義の効果の測定が可能か検討することが目的である。

1. 『講義「女性と日本文化」の効果測定項目』の内容と記述統計について

測定項目に使用した10項目が、授業が学生に影響を及ぼした結果として妥当であるか検討する。そこで結果とシラバスから導き出した効果を比較する。

学生のレポートより抽出した学習した10項目の内容は、①「一般的なマナーを身につける大切さ」、②「礼儀を心がける必要性」、③「美しさに気づくことができ感性の刺激」、④「日本文化の楽しさ、美しさを次世代に伝える希望」、⑤「視野が広がり人間としての成長」、⑥「生活を豊かにすることに有効」、⑦「文化継承の大事さ」、⑧「実習時の話題や言葉遣いに有効」、⑨「看護に必要な相手を尊重する心の学び」、⑩「日本文化への無知さの実感」(表1)。

講義「女性と日本文化」のシラバス上の「ねらい」を整理すると、期待する態度として以下a～dの4つが

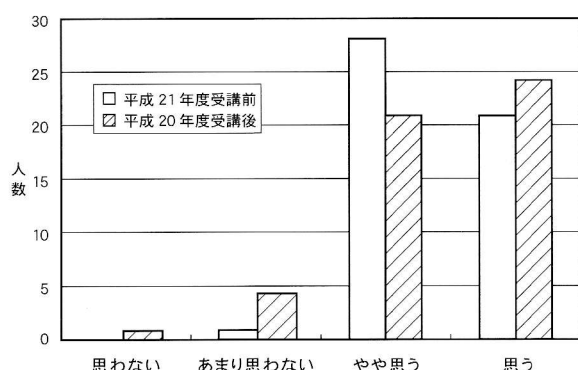


図 7. 項目⑦「この文化を継承していくことは大事だ」に関する受講前後の推移

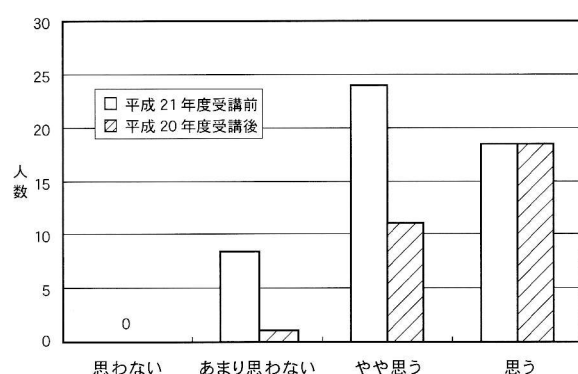


図 9. 項目⑨「看護に必要な心(相手を尊重する)を学ぶ」に関する受講前後の推移

あげられる。

- a) 「社会文化的な要素を身につける。」
- b) 「生活をより豊かにする。」
- c) 「次世代を育む。」
- d) 「伝統文化を継承する担い手となる。」

シラバス上のねらいの4事項と、学生のレポートから抽出した内容を関連の有無を検討する。

- a) 「社会文化的な要素を身につける」と同じ言葉を使用した要素は認めない。

ところで、「社会文化的」の意味を記載する辞典は見あたらなかった。そこで、「社会的」と「文化的」が合成されて語彙と解釈した。「社会的」とは、社会に関係するさま、社会性がある様。「文化的」とは、文化に関係のあうさま。そして、近代文化の要求にあうさま⁶⁾。以上より、社会や文化に関係のあるさま、社会性のあるさまと便宜上する。

社会に関係する、あるいは社会性のあるに関して、項目①②⑧⑨がある。

文化に関係することとして、項目④⑦⑩があげられる。

以上の解釈により、a) は項目①②④⑦⑧⑨⑩が該当すると推測する。

- b) 「生活を豊かにする」は、項目⑥に「生活を豊かにすることに有効」がある。

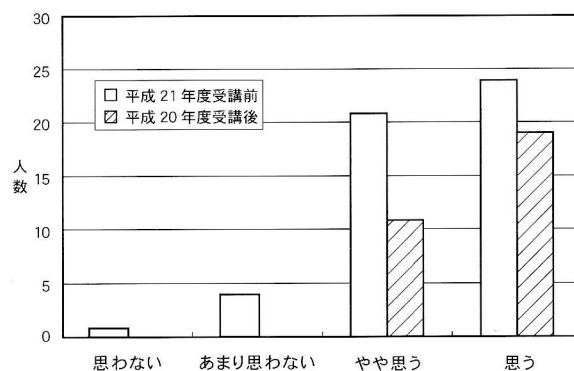


図 8. 項目⑧「看護の実習時、話題や言葉遣いなどに役立つと思う」に関する受講前後の推移

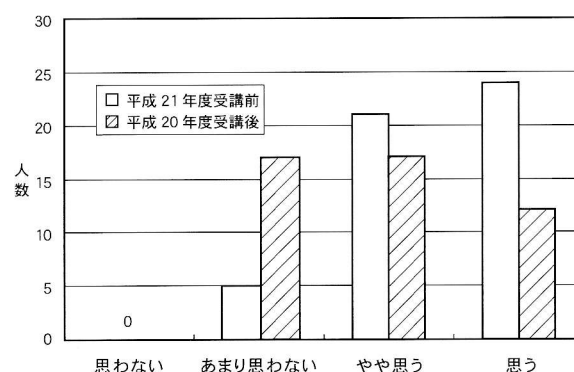


図 10. 項目⑩「日本の文化について知らなすぎる」に関する受講前後の推移

さて、生活の豊かさは、個人の価値観に由来し、ここで一般化を進めることは困難であり、正確さを欠いた行為に繋がりがかねない。しかし、敢えて言を進めると、価値とは、心理学の欲求論的アプローチの視点では、人間の欲求のうち社会的な欲望を満たすものであり、意思決定する際の根拠となる。自己・他者両方であれ、対象の価値を定める欲求に関する感受性の豊かさや多様な価値を認める成長心が、その背景として大切になると解釈すれば、bの生活の豊かさに③④⑤が含有される⁷⁾。

学生のレポートからの項目④「日本文化の楽しさ、美しさを次世代に伝える希望」は、シラバスのc)「次世代を育む」に関する肯定的感情の表現となっている。次世代を育む、伝統文化の継承する担い手に関する項目が少なく、社会文化的な要素を身につけるに関する項目が多い結果になった。これは、単純に、該当する概念の抽象度の水準の相違の影響も考えられる。ねらいの概念を現実的に検討する必要は存在する。

d)の「伝統文化を継承する」は項目⑦の表現と一致する。さらに、項目④はその行為のもたらす肯定的感情である。

以上をまとめると表3となる。

キー・コンピテンシーは激しい変化の時代を生きぬくために求められる新たな力であり、新しい知識を生み出

表 3. シラバスのねらいと抽出された学習(測定項目)の一致の確認

シラバスのねらい	抽出された言葉の一致	内容の一致
a 社会文化的な要素を身につける		①②④⑦⑧⑨⑩
b 生活をより豊かにする	⑥	③④⑤
c 次世代を育む	④	
d 伝統文化を継承する担い手となる	⑦	④

す学習を提供する教育の場を強調している。ここから、教育者は、高い専門性をもつ人材の育成には専門性教育のみでなく知識経済社会の時代に激しい変化を生き抜く基礎能力であるコンピテンシーの育成をはかることが不可欠であることを確認できる。そして、看護教育者は各々の領域別にそして看護教育全体のキーとなるコンピテンシーの明確化とその育成に向けて動きを進めることが不可欠といえる。キーコンピテンシーは自己形成力、人間関係力、道具活用力の三つにカテゴライズされている。自己形成力は自立的に活動する力であり、展望力、計画力、表現力で構成される。専門以外の領域に興味関心を持つ機会そのものの有意義さがある。人間関係力である対話力は、関係を生み、協働し、そこで生じる問題を問題解決する力で成り立っている。自己形成力から人間関係力を関連させるのが道具活用力であり、読解力、科学的思考、ツールを使いこなす能力がある⁸⁾。

学生が学習した内容は、自己形成力の展望力、自己形成力の対話力、道具的活用力の読解力に一致状況を確認したものが表4である。

学生の学びの多くは自己形成力の展望力に該当するとみなせる。展望力とは、ものを広い視野でみる柔軟な視点である。渡辺らは、華道・茶道・書道を取り入れた本講義同様の内容と方法の教養演習が人間性豊かな人材を育成するための基盤として有効であると評価していた⁹⁾。茶道・華道等の日本文化の習い事が戦前の都市部の女子教育において、結婚前の女子の徳育の一部とみなされた技芸の一部であった事実はある¹⁰⁾。学生が講義前に内容に抵抗を示していた状態から、伝統文化の継承の大切さを認識への学びに至っている。演習により自らの偏見や思い込みから解放される経験が、視野を広げ自己形成力の始まりである展望力を刺激すると推測できる。

人間関係力の第一段階である対話力、その基盤に該当する学びが学生に多かった。看護において、人間関係力は必要不可欠な能力である。トラベルビーは、看護師は出逢いの位相において、対象を「患者」でとしてではなく、「患者」の中に「人間」を感じることを努めとした。そして、そのために(i)看護師が自分自身を超越する能力を持つこと、(ii)自分とは別の能力として他人に興味を持つことを提案している。さらに、人(看護師)は他人とつながりを確立するだけでなく、他人の独自性を知覚することで、対象の共感的理解が可能になるとしている。¹¹⁾この技能は、他人に対する知覚の習慣を打破す

ることであり、容易な技ではない¹²⁾。この高度な技能の獲得に繋がりうる経験を、接触になかった伝統文化を体験することで可能にしたと考えられる。今まで関係のなかった事象に対しその知覚を変える経験は、人間関係力の育成に大きく影響したと推測する。そして、この能力の転移が看護学において有効に起こる機会の自覚が、改めて必要である。

読解力とは、例えば本を読むだけでなく、本を読むことを通して社会に参加する働き、利用する力、考える力と解釈できる¹⁴⁾。とすると、学んだ技能を通して文化継承したり生活に活用等の希望は読解力に相応する。この読解力を通して先のトラベルビーのいう人間関係における共感の位相に立ちやすくなると推測する。

目指した教育内容と学生の学びの内容は一致しており、10項目が、授業が学生に影響を及ぼした結果として表面妥当性があるとみなせる。

次に、10項目が授業の影響を見る際に、仮の尺度と見なすとき信頼性を持つか否か検討する。10項目の信頼係数は $\alpha = .830$ と高い信頼性を示した。つまり、内容に一貫性の或る10項目といえた。

平成20年度受講後は、項目①～⑨は左肩上がり、その他の項目は全て右肩上がりを示した。つまり、講義の学生は全ての項目に肯定的評価ほど多くなる傾向にあった。項目⑩の「日本文化への無知さの実感」に関しては否定を示した。ただ、10項目の信頼係数が、平成20年度受講後に限定するとやや低い信頼性を示した。対象人数の少なさが影響していると考えられる。

平成21年度の講義前は、質問の内容によって多様な分布を示した。知識不足を問う項目は不足を認知する傾向が多かった。反対意見が多かったのは項目④「日本文化の楽しさ、美しさを次世代に伝える希望」であった。

講義の影響を弁別可能との解釈ができるが、同対象の介入前後の比較による検証を重ねて、結論をまちたい。

2.『講義「女性と日本文化」の効果測定項目」各項目の差の検定について

マン・ホイットニーのU検定を実施した。項目⑧「実習時の話題や言葉遣いに有効」、項目⑩「日本文化への無知さの実感」の2項目で差異を認めず、それ以外の8項目で有意差を示した。

項目⑧「実習時の話題や言葉遣いに有効」は、講義後にこの意見を否定する傾向は皆無であったが、両群共回答傾向は右肩上がりであり、賛成意見が圧倒的に多かつ

表 4. キー・コンピテンシーと抽出された学習（測定項目）の一致の確認

キー・コンピテンシー		抽出した 10 項目
自己形成力	展望力	④「日本文化の楽しさ、美しさを次世代に伝える希望」 ⑤「視野が広がり人間としての成長」 ⑥「生活を豊かにすることに有効」 ⑦「文化継承の大事さ」 ⑧「実習時の話題や言葉遣いに有効」 ⑨「看護に必要な相手を尊重する心の学び」 ⑩「日本文化への無知さの実感」
人間関係力	対話力	①「一般的なマナーを身につける大切さ」 ②「礼儀を心がける必要性」 ③「美しさに気づくことによる感性の刺激」 ④「日本文化の楽しさ、美しさを次世代に伝える希望」 ⑦「文化継承の大事さ」 ⑧「実習時の話題や言葉遣いに有効」 ⑨「看護に必要な相手を尊重する心の学び」
道具活用力	読解力	④「日本文化の楽しさ、美しさを次世代に伝える希望」 ⑥「生活を豊かにすることに有効」 ⑦「文化継承の大事さ」 ⑧「実習時の話題や言葉遣いに有効」 ⑨「看護に必要な相手を尊重する心の学び」

た。茶道・華道・装道の学習が、言葉遣い等に有用であるとの認識は、受講の有無に関わらず大きく影響はなく、経験がなくても有用性に関する知識の普及は図れていると解釈できる。

項目⑩「日本文化への無知さの実感」は、受講前は賛成意見への度数が多く、受講後は日本文化への知識不足に関する否定意見が存在した。これは受講により日本文化への知識が増加したことへの自負心の芽生えとも解釈可能である。

それ以外の評価項目に関しては、いずれも受講後の対象の中央値が高く、つまり講義の効果があったと推測できる。

しかし、2 者は同一の対象ではなく、受講した学年は選択科目で科目への関心が高い、比較して受講前の学年は必修科目で必ずしも科目への関心が高いとはいえない。関心、すなわち動機づけのレベルの分布に最初から差異があった可能性は否定できない。

同一の対象を講義前後で比較した実証が必要である。

3. 方法に関して

対象に関し、その回収率が 100%であったことは、学生の自由意志を尊重する配慮が十分であったか再考する余地があると考えられる。また、母集団が A 看護系大学であるとして、最近の学年のみ対象としており、標本の偏りが認められ、一般化に限界がある。

尺度を「中心化」に傾向を懸念して 4 件にて作成したところ、各項目毎の度数分布はほとんどが右肩上がりの分布であった。反対意見・賛成意見の表示等による両端の度数が小さくなる点数化の工夫、さらにノンパラメトリック検定においても 5 件法以上でなければ正しい結果が導けないとする主張の存在から、5 件法以上の点数化を検討する必要を確認した。

信頼性は内的整合性の点においては $\alpha = .855$ と信頼

性係数が高く得ているが、そのほかの信頼性である安定性等に関し、再テスト法等により検討が必要である。

さらに、学生の実際に学習した内容から抽出した内容のみで、教員が学生に達成を期待する視点からは、妥当性に関する検討は表面妥当性のみであり、専門講師を交えて内的整合性から検討を始める必要がある。

初年次教育の教育効果の測定は始まったばかりの中で、効果測定を試みたことに新規性がある。そして、学生の実際の学びの成果から帰納的に抽出した内容を測定対象にしたことが事実に基づいた実際的な調査であり、独創性がある。

V. おわりに

A 私立女子大学看護学科、すでに選択科目として受講した平成 20 年度 1 年生 30 名、及び 21 年度から必修科目となった受講前の 1 年生 50 名、計 80 名を対象に、講義「女性と日本文化」が初年次の学生に与える影響について測定を試み、測定に使用した項目の有用性を検討した。

初年次教育の教育効果測定を試みたことに新規性があり、学生の実際の学びによる実際的な調査であり、独創性がある。

表面妥当性を確認し、かつ $\alpha = .855$ で内的整合性の高い信頼性を認めた。

項目⑩「日本文化への無知さの実感」に関しては、経験がなくても有用性に関する知識の普及は図れていると解釈できる。それ以外の項目は、講義の影響を介別可能との解釈ができるが、同対象の介入前後の比較による検証を重ねて、結論をまちたい。

ほか、標本の偏り、両端の度数が小さくなる点数化の工夫、5 件法以上の点数化、等尺度作成上の検討、安定性等に関し、再テスト法等により検討が必要である。

さらに、妥当性に関する検討は表面妥当性のみであり、専門講師を交えて内的整合性から検討を始める必要がある。

本研究にあたり、研究に協力して下さったA大学看護学科の学生に深謝する。

文 献

- 1) 菊池重雄：初年次教育の実際，看護教育，50（5），382-387，2009.
- 2) 海口浩芳：カリキュラムにおける一般教育の位置づけとその役割，北陸学院短期大，紀要 38，2006.
- 3) 大城凌子他：看護大学における初年次教育，看護教育，50（5），396-401，2009.
- 4) 渡辺善照他：薬学6年生課程「早期体験学習」における教養・マナー（態度）教育，日本医療薬学会年会講演要旨論等，16，318，2006.
- 5) 山田礼子：初年次教育とは何か，看護教育，50（5），376-381，2009.
- 6) デジタル大事泉
- 7) 上淵寿編：動機づけ研究の最前線，北大路書房，2004.
- 8) 立田慶裕：キー・コンピテンシーとは，第18回日本看護学教育学会教育講演，日本看護学教育学会誌，18（2），75-86，2008.
- 9) 上掲4)
- 10) 久保内加菜：女子教育の構成に関する歴史的研究（その1），山脇学園短期大学紀要，42，2004.
- 11) トラベルビー，J.，長谷川浩，藤枝知子訳：人間対人間の看護，医学書院，1974.
- 12) 堤由美子：鹿児島保健学科・講義「援助関係論」資料，2009.
- 13) 上掲6)

Examination of Items to Assess the Effects of Learning Derived from the Lecture "Females and Japanese Culture"

Sachiyo Ushinohama¹⁾, Takako Ozono¹⁾, Miho Yamashita¹⁾, Naomi Hirata²⁾

1) Kagoshima Immaculate Heart University

2) Kagoshima University Graduate School of Health Sciences Faculty of Medicine

Key words : Education in the first school year, Nursing college students,
Examination of effects

Abstract

This study was designed to identify valid items to objectively examine the effects of learning derived from "Females and Japanese Culture", a lecture provided in the first school year.

The subjects were eighty students in the department of nursing of a private women's college: thirty students took lecture class as an optional subject in 2008 when they were in the first year, and the remaining fifty students (currently in the first year) are going to attend class (a compulsory subject from 2009). We collected eighty (100%) valid responses.

Based on the reports from the thirty students, ten items were extracted: 1) importance of learning good manners, 2) necessity of observing courtesy, 3) cultivation of sensitivity to appreciate beauty, 4) responsibility to pass down the significance of and beauty of Japanese culture to younger generations, 5) acquisition of a broader point of view and progress as a human being, 6) its role to help us live an affluent life, 7) importance of passing down Japanese culture, 8) good conversation topics and a useful guideline when speaking in a proper manner during training, 9) learning to show respect for others, and 10) realization of the lack of my own knowledge on Japanese culture.

These ten items are considered to be valid to demonstrate that what the students learned from the lecture was consistent with its intended purposes as well as its positive effects on them. The items served as indices to represent the levels of perspectives and conversational skills (integral parts of self-establishment - a key competency required for college students) as well as reading ability (a capability to utilize tools). The confidence coefficient for the ten items was high ($\alpha = 0.830$).

We conducted a Mann-Whitney U test on the ten items, which were used in the assessment of the lecture "Females and Japanese culture", and a marked difference was observed for eight items.

The study methods should be reviewed (e.g., the implementation of re-tests and a questionnaire offering more than five response options) to reduce the biases in the samples, decrease the frequency of scores at both ends, and increase the equality of measurements and level of stability. Since the present study only focused on the apparent validity of the items, further studies should be conducted in collaboration with a specialist to examine their internal consistency.
